

題（タイトル）：固有のまちづくりに必要な生活調査

ある島に家族で旅行に行ったときのことだ。都市からほど遠くないその島は見事にリゾート化されていた。オーシャンビューのホテル、離れの温泉、野外でのバーベキュー、それらがワンセットで提供され、施設間を歩いて回遊するデザインとなっている。レストランの外壁には料理の巨大なパネルが掲げられ、日常生活を離れたリゾート・アイランドを演出している。ここには、人々の観光に求める要素がコンパクトに詰まっている。そうした空間が都市の間近にあって、手軽に利用できる利便性も備えている。これは都市のプランナーによってトータルにコーディネートされた時間空間であろう。

私は、この島にはもう行かないと思う。島での振る舞いが、決まりきった形で与えられていると感ずるからだ。それは、資料二が言うように、商業的な視点で押しつけられ、私たちの休息のあり方を型にはめようとしてくる。そうして、いつの間にか典型的な「リゾート」を消費することに慣らされていくのだろう。さらに、そこにあるのは典型的なまちおこしの開発過程である。おそらく、資料四が言うような、「解決をせまられている課題」としてまちおこしの調査が行われたのだろう。自治体の職員や住民の間には、「問題を解決しようとする熱情」もあつたはずである。にもかかわらず、どこにでもあるまちおこしのパターンが採用され、他と見分けのつかないような観光地

ができ上がってしまった。

地域の特徴を生かして人々を引きつけようとする試みが、なぜか同じところに回帰するという矛盾が生じる原因について、資料一は都市の「権力」から説明している。都市はさまざまな魅力と権威の作用をつうじて、地方を「自己の傘下」におく。地方にとっては東京につながるものが「発展」の代名詞となり、どこの地方でも、新幹線・空港・高速道路を誘致しようとする。こうした発想の中核にあるのは、効率性の観点であろう。まちの開発を請け負う企業と行政はコスト意識で結びつき、結果として均質なまちづくりに合意する。しかし、どのまちに行っても変わり映えがしないため、新しさやスマートさばかりが強調され、同じ「ものさし」の中での競争に陥っている。

型にはまらない固有のまちづくりには、資料四の言う「危機感」よりも「愛情」を重視することの方が肝要ではないだろうか。我がまちの行く末を案じた「危機感」に偽りはないとしても、それを回避しようとして出てくるプランは、住民の生活やくらしからは遊離した「まちのため」の商業的な企画と化してしまう。必要なのは、あくまで個々の生活やくらしに密着した視点である。住民は、このまちの何に愛着を持っているのか、そして何を誇りに思っているのか。人が地域にどのように根づいているのかを解き明かすことを調査目的とするとき、まちづくりはそのまち固有のものになるのではないか。

題（タイトル）：貧困を生み出すものと支援のあり方

一九五〇年頃の日本といえば、戦後の復興期から高度経済成長に向かつてどんどん豊かになっていく過程にあったはずだ。しかし、資料五の筆者、東北の農村に暮らす中学生の進や、小学生かもしれない弟たちは「ぜにとり」のために学校を休んで働いている。資料一に沿って考えるなら、戦前からすでに巨大な「都市」であつた東京が、この当時、さらに日本中の「農村」から「社会的余剰」を吸い上げて、財と権力が集中する場となつていたことだろう。東京タワーの竣工が一九五八年、東京オリンピック開催は一九六四年のことだ。こののち、首都の権力を支えるため、進のような貧しい家庭の子どもたちも「金の卵」という財として供給されていく。資料五の描く貧困は、「都市」と「農村」の権力構造を背景としている。

この「都市・農村」の構造的問題は世界的規模で見出すことができるものだ。資料一が指摘するように、たとえば南スーダンなど、食糧危機と紛争が多くの人々の生存を脅かしている国においてさえ、首都は高層ビルが立ち並ぶ近代的都市である。そのような国・地域は第三世界に属する。日本を含むより先進的な国家に対しては、第三世界は資源を供給してさらに富ませるといふ関係性にあり、ここでも「都市・農村」構造が再現されているともいえる。

先進国と第三世界のかかわりの中では、深刻な飢餓や貧困に

対し「人道的支援」を行うことが当然で、先進国に暮らす私たちが寄付をすれば善行と捉えられる。それが常識かもしれないが、金銭や物資を送ることが本当に「支援」になるのか、ここで少し考えたい。資料五において、進の状況を一層困難にしているのは、「僕の家には銭はない」ということが周囲に理解されないことである。それは、山元村で「かわいそうだ」と一晩に千円もくれるからだと思っている。その千円は、確かに一家の暮らしの糧だが、父が「かの」を買う資金ともなる。進や、おそらくは兄も、父の目論見には批判的だ。しかし、兄は「かのおこし」をやめようとはしないし、進は兄を手伝っている。なぜなのか。そこに、家庭内の小さな権力構造が存在するからではないのか。父は、母の健康状態に対しても配慮せず「ごしやくこと」があり、反論を許さない。それは、人道的支援を必要とする国に資金や物資が十分与えられても、権力の側にある者が恣意的に配分し、本当に弱く支援を必要とする者には行き渡らないことがあるということの縮図であり得る。

施しを与える側は気分が良い。しかし、与えて終わりではない。そこで何が起きているのか、どうすれば状況を打開することができるか、困っている者には何が必要か、それを見極めねばならない。そのためには、資料四において提示されているような、解決しなければという危機感や愛情に基づく真摯な調査が求められると考える。

題（タイトル）：他人の生活を知ろうとすることの暴力性

資料五において木川進という中学生が書き綴る、一九五〇年頃の山形県の農村の暮らしぶりとはとても興味深い。「祭文語り」という遊芸人である父親、子どもたちを慈しむ母親、荒地をひたすら開墾する兄、学校を休んで手間仕事をする弟たちとの生活を、進少年は生き生きと描き出している。富豪貴族の豪華絢爛な暮らしぶりや、退屈な日常を覆す劇的な出来事に人の注意は惹かれがちであるが、進少年が描く日常はそれらとは無縁である。決して恵まれているとはいえない人々が自らの境遇を受け入れ、淡々と日々を重ねていくさまが述べられている。このような人々の暮らしぶりに目を向け記録しようという眼差しは、富豪貴族が作らせた芸術作品ではなく、一般民衆の生活用品である「民藝品」（資料三）に美を見出す眼差しと同質のものであろう。そのような眼差しは、民藝品を顧みない「許し難い盲目」を告発し、民藝品を「愛を以て顧み」ようとする。同様に、進少年が描く一家の暮らしぶりに注目する眼差しは、彼らのつましい暮らしぶりが帯びる尊さに目を開くよう呼びかけているようにみえる。

だが、人の生活の実態を明らかにするということは、その者を対象化すること、客体の位置に置くことだということを忘れてはならない。資料四が述べるように、人の生活を事細かく調べ明らかにしていくのは、ある意味で残酷なことである。とり

わけ、社会的に弱い立場の者の生活を調べることは、他人に知られたくない日々の悪戦苦闘ぶりや惨めさを白日の下に晒すことになる。資料五の進少年の作文は生活綴方教育の一環として行われている。作文の筆者は進少年だが、それを書かせ、教育実践に取り入れたのは教師である。教師は進少年一家の暮らしぶりを調べ、その細部を明らかにするという役割を間接的に果たしているといえる。

そうである以上、資料四が述べるように、この教育実践に携わる教師は、解決を必要とする問題を前にした熱情や自己責任感を以て作文の書き手である生徒に臨む必要がある。様々な家庭の暮らしぶりを知っておきたいという単なる知的好奇心から、教師が生徒に暮らしぶりを書かせるとしたら、それは生徒に惨めさを味わわせるだけの残酷な暴力になるおそれがある。作文を書くことによつて、生徒は家族関係や家計のあり方を省みて、自らの行く末を思案するきっかけを得ることができるかもしれない。クラスの中での討論を通して、思いもよらぬ気づきを得る可能性もある。資料五のような教育実践が正当化されるのは、そのような自省と思考を後押しできるように、教師が注意深く当の実践を練り上げている場合に限られる。生活や暮らしについて語ることは本人にとって生身を晒すことに等しく、その内容は単なる一つの情報ではないことに注意を払う必要がある。

題（タイトル）：社会的問題解決に携わる際に必要な自覚

資料五では芸能を生業とする家庭で育った木川進の、傍からは見え辛い貧困や家庭内での問題、将来への不安が綴られている。ここで彼が直面している問題は過去の問題ではない。こうした見えない貧困、こどもの貧困や相対的貧困は現代においても取り組むべき課題であろう。

問題の当事者ではない者が、問題解決に取り組む際に備えねばならない条件がある。その一つが当事者に対する愛情である。さらに、愛情だけではなくその問題を自分の課題として抱え込ませるような心情、資質が必要である。取り組みの出発点としてそうしたものがなければ、取り組みがただの政治的宣伝の具になってしまうのだと資料四は述べている。

資料五の生活綴方教育を実践した先生はそうした条件を十分に備えていたのかもしれない。しかし、この先生のように特別な資質を備えた支援者と当事者だけの運動になってしまつては、社会的問題を解決するための仕組みを作つていくことはできないのではないだろうか。そうした人たちだけではなくて、資質はないけれども問題に関心を持つている多くの人を巻き込んでいく必要があるのではないか。なぜなら社会的な機能の一つとして支援の仕組みを作つていくためには、多数派の合意が必要となるからである。資料五で示される山元の人々のような一部の人々の支援だけでは十分な効果は期待できない。

だが、支援に参加する資質を備えていない人も参加することになると資料四が危惧するようなことが起きかねない。例えば、問題の当事者が直面している状況を報道することは多くの人々の関心を集め、問題解決へと向けた原動力にはなるかもしれないが、当事者や支援活動が別の目的のための手段となつてしまつては、報道もただのコンテンツとして消費されかねない。しかしどれもが持てるわけではない資質を支援参加への条件としてしまつては、上述のような理由から問題解決は困難になる。

特別な資質がない人も支援に参加し、かつ危惧されるような状況に陥ることは避けねばならない。資料二は社会関係に権力が作用し、その社会関係の網の中で形成された慣習が私たちの行為を規定すると述べている。木川の父は自覚的ではないかもしれないが、農村社会の慣習に従つて農耕で生計をたてようとして耕作に適さない土地を購入したといえるだろう。そして同じ構造の中で形成された慣習に従つて木川や兄に勉学よりも耕作を強制し貧困を解決困難にしているのかもしれない。支援に参加する者も、自身の行為を規定している社会構造と問題の当事者を窮地に追い込んでいる社会構造とが同根である可能性を自覚する必要があるのではないか。そのような疑念を持つことで、愛や強い動機付けがなくても、当事者や支援活動を別の目的のための手段としてしまつて疑いをもつことはできるだろう。

題（タイトル）：民藝品の美は社会的余剰とどこがちがうのか

中一の春、近所の雑貨店でみつけた椿の柄の簡素な茶碗に一目惚れして購入し、今でもその茶碗を大切に使い続けている。当時の私の小遣いからすれば少し値の張るものであったが高級品ではない。当然、桐箱に収め、時々取り出しては愛で、あるいは美術館に展示して有料で鑑賞するような美術品としての価値は全くない。しかし、茶碗を持ったときの重さや、ご飯をよそったときのほどよいぬくもり、お箸があたったときの軽やかな響き、毎食洗機で洗ってもこわれぬ耐久性など、私の日常を支える大切な器だ。この器は、私のお箸や湯飲み、我が家のキッチンやリビングの調度品と、とても調和している。むしろ、九谷焼の立派な茶碗では、一般家庭の少しごちゃごちゃした生活風景の中にはなじまず、浮いてしまうかもしれない。生活の用の美しさ、生活との調和的美など、民藝品にはその固有の美しさがある。それに目をつむり、文化財だけを美しいとする美の見方は「因習的」であり、「創造」がない（資料三）。

もつとも、中学生になったばかりの私の行動範囲と小遣いの金額は、必然的に購入可能性の範囲を規定する。また、紺色の無地ではなく朱い椿の花柄を選んだのは、弟と違って私が「女の子」だからという、日本社会における男女の一般的なイメージによって強化されていたのかもしれない。このように、私の美的選択行為は自己完結しておらず、「自分以外の他者との関

係」を抜きに考えることはできない。「社会関係の網の目のなかで形成されてきた慣習によって強く支配されている」という意味において、民藝品の美もある種の力関係に支配されている。しかしだからといって、生活の器を美しいと評価するとき、それが権力作用であるか一律にくくってしまうのは乱暴だ。先述のとおり、生活の器の評価基準と美術品の評価基準とは、自ずから異なるからだ。美術品としての茶碗は、たとえば人間国宝の手にかかれば法外な値段がつく。政治的に選別された人間の作品には、余剰の価値が天井知らずでついていくのだ。日用の美もまた、単に用をなす以上の価値を見いだしている点において余剰が発生している。しかしその余剰は、政治や経済や宗教によって準備され、支えられた「社会的余剰」（資料一）ではなく、一元的に通用する価値基準でもない。日用品がもっている性質や意義によって支えられ、一人ひとりが愛着とともに見いだす創造的な美である。そもそもその茶碗を作った人がなぜその柄だったのかと問われても「よく売れたから」「それが仕事だったから」としか答えられないかも知れないし、器を選んだ者は「いつも使っているから」「たまたま目についたから」としか答えられないかもしれない。窮極の一点物を作ることや、あるいは権力や財力を使って一点物を手したり、その器にあらうような部屋をしつらえたりすることは全く別の「意図や動機」（資料二）に民藝品の美は支えられてあるのだ。